

第3回京都市伝統産業活性化推進審議会

日時 平成18年6月7日(水) 午前10時00分～

場所 京都弥生会館「上賀茂」の間

出席者(五十音順,敬称略)

池坊 美佳	華道家元池坊青年部代表,京都館館長
岩淵 恵子	京都市小学校長会副会長,京都市立高倉小学校校長
江里 佐代子	截金作家
柿野 欽吾	京都産業大学経済学部教授
高木 壽一	財団法人京都高度技術研究所理事長,京都市国際交流会館館長
西島 安則	京都市産業技術研究所長
原 左穂子	株式会社高島屋京都店販売第5部教育担当課長
南 恵美子	株式会社ホテルプリンセス京都取締役支配人
南出 隆久	京都府立大学人間環境学部教授 京ブランド食品認定・品質保証委員会副委員長
三宅 道子	市民委員
森井 保光	京都市産業観光局長
吉澤 健吉	京都新聞社編集局次長
若林 卯兵衛	京都伝統工芸協議会会長
渡邊 隆夫	財団法人京都和装産業振興財団理事長,京都商工会議所副会頭

欠席者

高井 節子	京都市立芸術大学美術学部専任講師
谷 裕江	市民委員
星川 茂一	京都市副市長
若林 靖永	京都大学大学院経営管理研究部教授

1 開会

2 西島会長挨拶

3 京都市伝統産業活性化推進計画中間報告案について

<柿野副会長兼計画検討部会副部会長から前回の骨子案からの変更点について説明>

<会長>

- ・京都の伝統産業を支えていたのは文化であり,文化を作った市民の感性である。伝統産業の活性化は,京都の良さをもう一度味わって,京都を愛してもらうことであり,それが広がっていくことである。
- ・委員からの意見をいただきたい。

<副会長>

- ・伝統産業を取り巻く状況の現在の特徴的課題として売上低迷,後継者問題,原材料・用具の確保難,海外生産の増加,多段階で複雑な流通の5点がある。確かに売上は低迷しているが,日本経済が上向き出しているにも関わらず,伝統産業業界は引き続き厳しい状況である。これは構造的な問題にあり,課題として,和の需要の低迷や生活様式の

変化があるという認識を入れるべきである。

- ・国に施策や支援を求めていく必要があると追加した「その他」は、重要な点であり、「国への要望」とタイトルを明言した方がいいのではないか。
- ・京都伝統産業ふれあい館の活用に合わせて有料化も検討すると追加したが、有料化のねらいを入れる方がいい。

<会長>

- ・京都伝統産業ふれあい館はいささか魅力に欠ける。事業を次々に行ったり、全ての伝統産業品は多いので焦点をしぼった「織の日」や「漆の日」などの企画をしたりすればいいかもしれない。

4 「業界調査」の結果について

(事務局から概要を説明)

- ・72品目(69団体)に対し、去る2月10日から24日まで業界調査を実施。69品目(66団体)が回答。

<会長>

- ・技術の継承と革新については、御苦労されていることがわかった。

<委員>

- ・京都で金箔はほとんど作られていないと聞いている。この問題は京都人としては残念なこと。中国でも作られているようだが、箔の打ち紙に問題があり良質ではないと聞いている。昔は、良質な金箔が京都で作られていた。現在は滋賀県に1人だけおられると聞いている。

<会長>

- ・質の低下や入手困難という問題はたいへん重要であるということがよくわかった。

<委員>

- ・京都には当たり前のように多くの伝統産業や伝統文化がある。若い人には実際に触れ、経験していただき、これは残さないといけなと思っていただくことが重要である。触れてもらう入口づくりを是非やっていきたい。

<委員>

- ・「京都から学ぶジュニア日本文化検定」の本は、小学4年生以上に無料で配布され、5・6年生は全員が検定を受けることになっている。この本の中の記述が、自分たちの町の様子や暮らしとどう繋がっているかを知らせないといけなと考えている。
- ・業界調査では、無回答の数字がたいへん高かった。日本の子どもは、自分の考えがきちっと言えない、記述できない傾向にあると言われている。自分の関係ない事柄には答えない傾向もある。

<副会長>

- ・これは回答のしづらさに原因がある。無回答が多いのは、最盛期は 社、従事者人などと具体的に回答しなければならない設問で、記入のハードルが高い。無関心でそう回答しているのではないことが推測できる。

<会長>

- ・企業ごとには記入できても、団体となると一層困難な設問である。

<委員>

- ・実際に制作現場を見ていただくことも理解が深まると思う。海外の美術関係者や国内の文化財関係者に、工房を見ていただくことがある。見ていただけるように準備をした

仕事場ではないが、御理解をいただくためと思っている。

<会長>

・できればふれあい館のような場所で、見せるためのプランがあるといい。

<委員>

・実際に仕事をしているところを見ていただくのが一番いい。職人が話し合っ、ローテーションを組んで、ものを作る場（時間）を提供すればいいと思う。

<会長>

・最近では、新聞での伝統産業に関する紹介も丁寧で、工房や仕事姿の写真が紙面で見られる。

<委員>

・昔は職人さんの世界はハードルが高かった。話のうまい職人は腕がおちると言って無口な職人さんが多かった。最近ではきちんと伝えようとする方が増え、話し方もうまいし、仕事場もオープンにされる職人さんが増えてきた。

<委員>

・ものを作るという自分の意識をしっかりと持てば言葉も出てくる。最終的には「作品を見て欲しい」というのが本音であるが、自分の主張を伝えるためには言葉でないと伝わらないこともある。また、このような会議に出て、他の方の発言から刺激を受けることも大切だと思っている。

・業界調査は、最後の「自由意見」も大変参考になった。悩んでいるのは自分だけではないと思った。

・京都の「伝統」を守る、また継いでいくために華道や茶道がもっとも大切であると思う。衣食住のすべてに通じ、五感に響くことで育てることにつながっていくのではないか。

・最近、町家を飲食店などにうまく利用しているが、子どもたちに本当の使い方をきちんと知らせていないのに、町家の良さが伝わるのかと心配になる。

・子どもたちには地蔵盆などの行事によって京都の暮らしが見えてくることもある。伝統産業のことも町内レベルで話しができるようになれば大きな動きになると思う。

<委員>

・売上低迷の原因や、有料化を検討する背景を記述しておかないといけない。国の責務もタイトルを付けて記述される方がいい。

・伝統産業教育は子どもたちが将来的に使用者になってもらうという観点がある。青年になったら1～2年間伝統産業に従事してもらうことを義務化するぐらいのことも必要だと思う。

・北欧では公共事業の何%かを美術品に充てるシステムがあると聞いている。国に対して手仕事産業を救うための財源を確保するよう要望することも大事ではないか。

・計画には、業界の活動のことばかりではなく、誰もが納得する明確な内容を書くことが必要である。

<会長>

・伝統産業活性化ということを誰に訴えるかというところが、はっきりしない。使用者、メーカー、流通を含めた産業に力をいれたが、それを支える文化をどうするかという課題もあり、なかなか簡単ではない。

<委員>

・業界人にとっても行政にとっても人を説得できるような「気合い」というようなものを盛り込むことが重要であり、それさえできれば細々としたことはいらぬ。文化とい

うものは合理性だけで片づけるべきものではない。

<委員>

・5月末頃に国際会館で裏千家の近畿地区大会があり、2日間で4300名が参集され、ほとんどが着物姿だった。伝統文化のパワーの凄さを実感した。

・裏千家は明治維新で相当な打撃を受けられたが、そういう時代から現在に至る隆盛や再生された手法というものを学ぶことは大事である。40年余り裏千家の組織を拝見しているが、組織の自立や、発信されていることの重さなど、徹底できることの凄さがある。

<委員>

・具体的な取組がたくさん書かれているが、大項目であって、どのようにして実行していくのかに関心がある。

<会長>

・構想段階の文章は誰もがわかりやすいものになっているが、計画になると枠にはめられてしまって、市民へのアピールやどのような効果かがわかりにくくなる。

<委員>

・京都に住んで、私に何ができるのかという意識レベルに立てば、そんな大層なことでもなくてもやれるのではないかと思う。教育の現場で伝統産業の学習をしても、その後ろにいる親や、隣の家の人はどうなのかというように広げていかないと、子どもが本当に実践する力にはなり得ない。

<委員>

・市場開拓の中に出てくるのは高級品であるが、私は伝統産業というものは裾野が広がらないとだめだと思っている。日常的に使用できる道具を子どもの頃から使わせ、高級なものも見せ、良いものとそうでないものが見抜ける目を養うようなことは大事である。

・庶民の暮らしを支えてきた町家の本当の有様を子どもたちにどう伝えられるのか、本当の京都の良さとして知ってもらわないといけないと思う。

・ものにも命があって最後まで使い尽くすという文化が日本にはあった。ものを大切にする文化というものが伝統産業と関係していたように思う。この計画案では謳えないかもしれないが、市民府民に訴えかけられることができればと思っている。

<会長>

・京都に住むことが文化の後継者になっているのだという自覚を持っていけばいい。

<委員>

・4つの基本理念と目標では、これは伝統産業に従事する人が、どんな考えで、どんな方向性をもってやるべきかが明らかにされている。これを軸に、具体的な取組についても、携わる方がどういった取組をしたらよいかという視点で順番を変えた方がいいと思う。

・「その他」のタイトルは「国への依頼」や「国との連携」といった表現の方がいい。

・箱書きに食育授業と書かれているが、用語としてあるのか。あまり聞いたことがない。

<委員>

・業界と行政は今回の条例ができるまでに何十年も議論してきている。今回一番期待しているのは、市民の購買意欲をかき立てる方法である。

・京都館が移転する際、物産館でない京都館に期待している。京都文化の発信基地として京都館を活用していただくようお願いしたい。

・お茶もお花もお寺も伝統工芸品の使用場所である。そのようなところにどうアプローチしていくかが課題である。

・インターネットを使って体験募集をしたら好評で、外国人の方々から見学の申込みがあった。こうした場をどう伝達し、来ていただくか考える必要がある。ただし、職人は手がとまると仕事にならないことも考慮する必要がある。

・後継者については、儲ければ自然と後継者ができるものである。工芸品を買ってもらうことが第一である。

・行政が発注する施設建設では、何%かを京都の工芸品を使うというような仕組みをつくっていただきたい。

< 副会長 >

・「海外」や「世界」という言葉が多く記載されているので、具体策として「海外のマーケット～」や「海外市場の～」という取組を何らかの形で入れていただきたい。

< 会長 >

・京都博をニューヨークやパリで実施できるといい。

< 副会長 >

・22頁に「施策の進捗度が目標の達成と直結するものではない」と書いているが、「行政は施策をきちんとやりました。それで実績が上がらなかつたら知りません」と言っているようなので、ここまで記載する必要はないと思う。その前の文章には「あくまでも事業者が主体となり～」という表現で十分わかる。

・こういう大きな計画は結局のところ市民にとって何なんだという点であるが、私は「京都発のスローライフの提案」ではないかと考える。着物を着たら動きにくいから着ないというのが今の生活だが、着物を着るにも時間がかかり、動きにも時間がかかるが、そういうことがスローライフの基だと思う。

・先ほど「工芸品の普及品を子どもに使用させて～」とお話があったが、スローライフの考え方というと、良いものかどうかを分からせるには、子どもにも高くても京都製の本もの、良いものを使い、触れさせないといけぬ。雑に扱ったら割れたり壊れたりするよ。大事に扱ったら段々その良さが出てくるよ。そのようなことを味わう生活を京都から提案したい。言葉は再考したらいいが、京都発で日本や世界に発信する、そういう理念みたいなものがあればいい。

< 会長 >

・中間報告を丁寧に審議していただき、重みも厚みも増した。行政、業界に市民も入れて、京都の文化、日本の文化を伝えていくことが重要になると思う。

・皆様の意見を踏まえ、概ねこの方向で中間報告とさせていただくことを御了承いただきたい。

5 スケジュールについて

(事務局から説明)

・今月20日から7月19日まで計画の中間報告の概要版を用いて審議会から市民意見を募集。

・9月には第4回審議会を開催する予定。

6 閉会